

大学と地域との連携による 新しい熱田のまちづくり

水野 品夫●名古屋学院大学教授



名古屋市熱田区

●熱田の歴史

熱田区は名古屋市のほぼ中央南部、熱田台地の上に位置し、その中央には、三種の神器の一つである草薙剣を神体とする熱田神宮がある。来年二〇一三年には創祀千九百年を迎えるそうである。年間六百五十万人もの参拝者にあふれる熱田神宮は、市民から「熱田さん」と親しみを込めて呼ばれている。

この熱田には、古くから人が住み集落がつくられ、縄文時代から弥生時代の遺跡も多く残っている。熱田神宮の北西約六百メートルには、東海地方最大の前方後円墳で、六世紀初頭に築造されたと考えられている断夫山古墳^{だんぶさん}も残っている。

戦国時代を経て近世になると、徳川家康によって東海道が整備され、熱田は、東海道と佐屋街道・美濃路をつなぐ交通の要衝として多くの旅人でにぎわい、東海道最大の宿場町「宮宿」として繁栄した。宮宿の西側の大瀬子には海産物を扱う魚市場が発展し、また、名古屋城築城に際して、熱田の真ん中を南北に通る堀川が開削されると、その西側の白鳥に貯木場が造られ、物流の拠点としてもまち

が
発展した。

●名古屋学院大学名古屋キャンパス開設

二〇〇七年四月、堀川西側の白鳥貯木場跡地の一部に、名古屋学院大学名古屋キャンパスが開設されることとなった。熱田区のイメージは、熱田神宮をはじめ名古屋の誇る神社仏閣・名所旧跡が数多くある地域だが、実際に職場のある名古屋キャンパス白鳥学舎の私

名古屋キャンパス白鳥学舎前の
「なんじゃもんじゃ(ヒトツバタゴ)並木道」





の研究室から望む風景は、隣接する名古屋国際会議場、その北側の名古屋市中心部中央卸売市場と巨大施設が並んでいた。また、

通勤の途中で横切る堀川端はプロムナードとして整備されていて、川辺の光景もきれいだった。

四月の下旬になると名古屋国際会議場から名古屋学院大学、そして白鳥庭園に延びる並木道には、「なんじやもんじや（ヒトツバタゴ）」の白い花が一斉に咲き、まるで木々に季節外れの雪が積もっているような美しい景観をGW明けまで生み出していた。

●大学と地域との連携による熱田まちづくりの推進

名古屋キャンパスの

開設と同時に、熱田での本格的なまちづくり活動が始まった。二〇〇八年に名古屋キャンパス近くにある日比野商店街にて、学生運営のまちづくりカフェ「マイルポスト」がオープンし、その学生たちが中心となり、日比野商店街の新規イベントやプロジェクトが次々と立ち上がった。商店街加盟店舗数は、名古屋キャンパス開設前四十二であったものが、二〇一二年には七十を超えるまでになった。二〇一〇年には、大学との連携事業が評価を受け、日比野商店街は愛知県活性化モデル商店街の認定を受けた。

二〇一〇年には、名古屋国際会議場で生物多様性条約第十回締約国会議（COP10）が開催され、それに関連して、大学キャンパスの屋上にて都市養蜂プロジェクトが立ち上がることになった。地域の子どもたち向けに、養蜂場の見学や採蜜イベント・環境プログラムを実施し、また、採れたハチミツを使った商品開発により、商店街活性化にも寄与した。

さらに、熱田の観光まちづくりを推進する「あつた産業再発見マイスターの会」が、名古屋学院大学の企画した熱田区との連携講座を通じて立ち上がり、名古屋の新しいB級ご当地グルメ「あつた餃子」を誕生させた。

これらはすべて、名古屋学院大学が関わった熱田の新しいまちづくりの動きである。また、こうした取り組みを通じて、熱田のまちを誇りに思う人材育成ができたことを、私は一番の成果だと感じている。

食の都大阪にふさわしい食文化学部の設置

—「食」の実践と理論を兼ね備えたプロを目指す

関野 章代 ● 梅花女子大学食文化学部長

一 食文化学部食文化学科設置の経緯

梅花女子大学は大阪北摂に位置し、創立百三十五周年を来年一月に迎える。文化表現学部・心理こども学部・看護学部・食文化学部の四学部七学科を有する小規模女子大学である。

食文化学部設置までは、短期大学部に生活科学科調理製菓専攻調理コース、製菓コースを配置していた。各コースとも各々の養成科目で単位がほぼ充足し、短期大学教育に本来必要な専門科目などを十分に設置できない状況があった。また、食に関する四年制の大学は管理栄養士の受験資格が取得可能な大学というのが一般的で、文系の女子が食を勉強する場がない状態であった。これらの現状を踏まえて、二〇一〇年に立ち上げた新学部開設検討委員会で、生活科学科の資源を生かす、すなわち調理師の資格がとれ、製菓も学べる学部学科の開設が決まった。調理師養成施設であり、かつ文系の女子に向けた食の学びを展開する、食の都大阪にふさわしい学部学科（定員八十名）を設置することになった。また、本学で

は食に関する求人が以前から多く、これも本学部をつくる後押しとなった。

二 教育の理念

本学の建学精神は「キリスト教精神に基づき、他者への愛と奉仕の精神を備える自立した女性を育成する」であり、スクールモットーは「人にしてもらいたいと思うことは何でもあなたがたも人にしなさい」である。命と心をつなぐ「食」について学ぶことは、この「愛・奉仕・自立」の精神を体现することでもある。本学部では、「食」からの人間教育を行うことと、「食」に関する実践と理論を兼ね備えたプロフェッショナルとして、人間生活の向上に寄与できる女性の育成を目指すことを目的としている。

三 特徴

「食」に関する実践と理論を兼ね備えた、プロフェッショナルを目指す。



01

日本初の調理師養成のための4年制教育

「食」についての幅広い専門性を身につけます。同時に、2級菓子製造技能士(洋菓子)の受検資格も取得できます。

02

「食」をトータルにマネジメントできる人材の育成

調理・製菓実習に加え、「食育・食の安全」「食産業」「食文化史」の視点から「食」に関わる専門知識を深めます。

03

文系女子の就職をサポートする教育内容

ビジネスマナーや社会人基礎力を学び、あらゆるビジネスに対応する資格取得の機会が豊富にあります。

食に関しては、今まで管理栄養士養成を念頭においた食物科に代表される学科が主であるため、化学などに興味のある高校生を重点において教育をしてきた。

しかし、本学部は、食に興味・関心があり、将来、食に関わる仕事に就くために、実践力と知識力の両方を身につけたいと考えている文系女子高校生に焦点を絞った初めての学部学科である。ひと言で言えば、食を扱う学部でありながら文系寄りのカリキュラム内容になっている。学部の特徴は主に次の四つである。

(1) 調理師養成のための教育と「食」をトータルにマネジメントできる人材の育成

調理や製菓など「食をつくる」基本的技術と大学教育の専門科目が融合したカリキュラムをつくった。「食をつくる」調理実習・製菓実習などチームワークを大切にする実習が豊富であり、実践的技術を身につけるため、実際の現

場・実習で段どりを経験することを大切に行っている。実習は、技術習得だけでなく「チームワーク」の大切さを学ぶ場としてもとらえ、カリキュラムを構成している。実社会で必要な「チームで協働する力」を、実習授業Ⅱチームワークスタディとして取り組むことで育成する。これらは、あらゆる仕事の現場で必要となるコミュニケーション能力を養うことでもある。専門教育は「食育・食の安全」「食産業」「食文化史」の三領域でカリキュラムを構成し、学生個々の興味関心のある領域を中心に「食」の専門知識を学び深める。一学部一学科でありながら専門科目は系統の異なる学びが三領域あり、三学科並の学びが可能になる特色ある学部学科である。三領域での奥深い学びは演習で補うようにしている。

(2) 文系女子の就職をサポートする教育内容

大学生の就職環境が厳しさを増す中、「就業力養成実習」「ビジネスマナー入門」「インターンシップ事前事後指導」などの授業により、自立した社会人に求められる知識や態度を学び育て、同時に現場力を養成する。また、あらゆるビジネスに対応する資格取得の機会を提供している。

(3) 幅広い就職先と確実な出口(就職)

「食」だけでなく、それ以外の業界も視野に入れるため、卒業後の進路就職選択肢が大きく広がる。「インターンシップ」とインターンシップへの準備と経験後の「インターンシップ事前事後指導」などで、なりたい自分・自己の将来像を具体化する。自分の選択に責任をもち就職活動に力をつけ、正社員としての採用を目指す。

(4) 充実した学習環境

調理実習室は機能性を重視し、最新の調理設備・器具を完備している。教員の手元が見えやすいようにモニターを配置した。室内はガラス張りのゆったりとした空間になっている。入学時には、学生全員にノートPCを貸与している。

四 カリキュラム

日本初の調理師養成のための四年制教育で、一・二年次では調理師養成の観点からカリキュラムを立ち上げ、二・三年次から大学教育へと幅を広げたカリキュラムになっている。さらに、製菓に興味関心のある学生に二級菓子製造技能士（洋菓子）受検資格を得るための科目を配置した。

本学科で取得可能な資格は、調理師免許、二級菓子製造技能士（洋菓子）受検資格、HACCP管理者資格、介護食士三級、中・高教諭一種免許「家庭」である。HACCP管理者資格は、女子大学では日本初である。

カリキュラムの詳細を次に述べる。

(1) 一年次

「食」に関する基本知識と技術を修得する。調理師養成科目を「学科基本科目」として配置した。調理実習を通してチームワークを身につけ、調理師養成科目で「食」に不可欠な衛生管理の知識、食文化への理解を学ぶ。また、化学を高校で学習していない学生が多数いるため、化学を一年次に必修にしている。化学は他の授業を理解するのに必要な最低単位とした。さらに、社会に結び付く就業力を身につけるため、実

践的な就業力教育としての「就業力養成実習」「ビジネスマナー入門」を配置した。また、入学当初の仲間づくりと大学での学びを知る目的に「梅花セミナー」がある。

(2) 二年次

より専門的な調理実習内容に進むことで、さらに技術力を高める。後期から製菓理論、製菓実習が始まる。製菓理論、製菓実習は二級菓子製造技能士（洋菓子）受検資格を得るための科目で、将来パティシエなど製菓に興味関心のある学生に履修を勧めている。二年次で調理師養成課程の科目はほぼ終了する。二年次から本格的に専門科目の履修が始まる。この専門科目は「食育・食の安全」「食産業」「食文化史」の三領域で構成している。

三領域の詳細を次に述べる。

①「食育・食の安全」領域——従来の食分野における専門的な学びと近年問題となっている「食の安全」の確保を学ぶ。食品加工での衛生面や、流通の視点から「食」の安全を見つめる、食の安全確保に携わる人材の育成である。「食品の品質・製造管理」「HACCPワークショップ」「食品アレルギー論」など十九科目を開講している。

②「食産業」領域——調理・製菓の現場力を備えたビジネスパーソンの育成が目的である。食産業で従来分離していた経営サイドと調理サイドの融合を目指し、経営サイドの学びを展開し、経営と「食」の現場統率力で食産業の未来を開いていく。さらに、食を提供する現場で求められるホスピタリティ（おもてなしの心）も養う。「ビジネスマネジメント」「食

の企画と演出」「ホスピタリティーマーケティング」「経営管理論」など十七科目を開講している。

③「食文化史」領域——食文化の歴史研究から国際理解を深め、広範な食文化の教養的知識を有する人材育成が目的である。「食と近現代」「大阪の食と文化」「コナモン文化論」「産地消論」「世界食文化研究」など二十四科目を開講し、充実させた。大阪・日本・世界発信の食文化から「食」を深く追究する。

これら三領域「食育・食の安全」「食産業」「食文化史」から、学生個々の興味関心をもとに一つを主軸としながら、多角的に他の領域も学ぶことができる。この主軸担当教員が学生個々のアドバイザーになり、学生たちと密にコミュニケーションをとる。年次進行に伴って、さまざまな「食」についての専門教育を学び、「専門力」と「現場力」を身につける。

(3) 三年次

自分がどのような「食」の分野で活躍ができるのか、なりたい自分を具体化しながら「食育・食の安全」「食産業」「食文化史」を学ぶ。また、インターンシップが始まると同時にインターンシップ事前事後指導でインターンシップの経験を確実なものにする。現場力を身につけ、大学で学ぶ意義と社会とのつながりを考えながら、三年次からの就職活動に力を発揮する。

(4) 四年次

これまで学んだ知識や技術を通して、「食」にまつわるさまざまな研究テーマに取り組む。

五 現在取り組んでいる事柄の紹介

(1) 一年生への進路アンケート
調理師、パティシエ希望者が多く、さらに高度な実習を検討する必要がある。今

の高校生が求めていることに敏感になりながらカリキュラムを形成する姿勢が重要である。

(2) 社会貢献

① 本学と大阪府中央卸売市場との事業連携
・山形県・鳥取県・長崎県・熊本県などのJAから農業の話題の提供があった。学生たちに各地の農業の現状と課題を理解させる機会になっている。
・大阪府中央卸売市場での「食に関する講演会」で本学教員を派遣している。
・阪急オアシスと旬の食材を使い、レシピを提

食文化学科1年生へのアンケート(7月) 集計82名・重複可

	1位	2位	3位	その他	合計
作る・売る	カフェ・飲食店 46名	ケーキ屋 34名	ホテル・旅館 29名	74名	183名
企業	メーカー 34名	ホテル・旅館 28名	ブライダルホール・会館 18名	45名	125名
独立・教育・メディア	独立・開業 12名	教員 12名	料理・菓子 教室講師 11名	35名	70名

2012年6月、JA鳥取福部でのらっきょう漬けの指導



2012年10月、豆腐製造企業の見学



2012年9月、培花女子大学校にて民族衣装をまとった学生と教員



供する連載企画を行っている、阪急オアシスのHPに「食文化学部のおすすめレシピ」としてスタートした。

② 地産地消の実践

茨木市見山の郷と地域交流をもち、食材を調理実習などに使用している。

③ 茨木市立男女共生センターローズWAM
ローズWAMと協働企画で講演会等を行い、本学教員を派遣している。

(3) 社会見学

近隣の食企業・食産業への見学を実施している。京都宇治

茶工場、和歌山南高梅工場、豆腐製造企業の見学などを通して食品の品質・衛生管理の重要性和食文化の由来などについて学ぶ。これらの社会見学を充実させ学生の将来の展望を考えさせる。

(4) 世界の食文化体験と異文化交流

二〇一一年に協定校となった韓国の培花女子大学校伝統調理科に本学学生たちが九月に表敬訪問し、韓国の食文化に直接触れ合う国際貢献をした。これは、大学生活の早い段階で異文化体験をするのを目的にしているためである。また、ヨーロッパなどへの食文化研修も必要になってくると考えて

2012年8月、オープンキャンパスの調理実習への たくさんの参加者たち



いる。本学の国際交流センターを利用して三年次での中国・韓国・欧米への留学を経験し、生の世界の食文化を体験するように学生たちに勧めている。

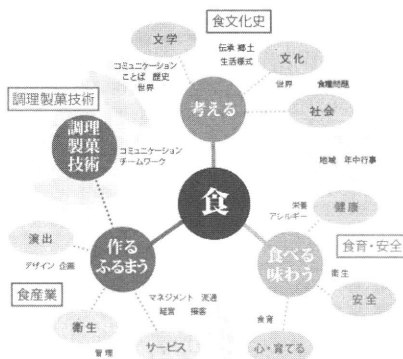
(5) オープンキャンパス

オープンキャンパスでは、簡単な調理実習・製菓実習を設備の整った新しい実習室で行っている。

の魅力と特色を対面形式で高校生と保護者に説明をしている。このオープンキャンパスは、入学生確保に最も重要な行事である。今年度も昨年度同様高校三年生から中学生まで集まり、実習などの経験をした。

六 おわりに

下図は食文化学科の学びの様子を表している。「食」を核として、いろいろな学びが広がるのがわかる。調理師養成科目で栄養学・食品学・食品衛生学などの基本知識をしっかりと



キウラムを精査しながら学問の発達、食産業の現場の傾向などをいち早くキャッチし、それらを教科内容に反映させ展開する必要がある。学問の発達は教員集団で対応し、食産業の現場は本学のキャリア支援部の支援を得ながら、インターンシップなどで人脈を形成し、情報を取り入れる努力が必要である。これらの成果は、三年後の一期生の成長を待って現実化する。また、本学部の使命である食のリーダーとして活躍する人材を実社会に送り出すことができているか、何年かのちには検証する必要がある。

日本で唯一の食文化学部は、従来になかった切り口で食の学びを展開し、食文化の未来を開拓するという自負と気概をもって学生・教職員一同全力を注ぐ決意である。

身につけ、「食文化史」領域で食の歴史の奥深さを吸収し、「食産業」領域などで今の世の中動きを学び、食文化と経済を融合しながら、食全体を考える力を学生に身につけさせることが将来への展望である。具体的には、今のカリ

長尾 ひろみ ● 広島女学院大学学長

歴史と伝統に戻りつつ、新体制を考える

一 よつめ

二 創成期

広島女学院大学は、一九四八年十二月に文部省から新制大学として認可を受け、広島の私学においては初めての四年制大学として、一九四九年四月から英文学部英文学科という一学部一学科新制単科大学が発足した。また、広島女学院大学は、前身に専門学校家事科をもっており、これも一九五〇年四月に広島女学院大学短期大学部家政科として開学した。しかし、これは戦後の日本における教育改革に基づいた新しい体制であり、歴史をひもとけば、それよりも六十年も前の一八八六年に広島女学院は始まっているのである。現在、創立百二十六年の歴史をもつ学校である。

広島女学院の創設者は砂本貞吉である。砂本は、一八八〇年に航海術を勉強するためにロンドンに向かったが、途中でサンフランシスコにて下船し、そこでキリスト教に出会い、伝道者となった。三十歳の砂本は、一八八六年に六年ぶりに広島に帰ってくる。その目的は、自分の母親をはじめ広島の人たちにキリスト教を伝道することであった。

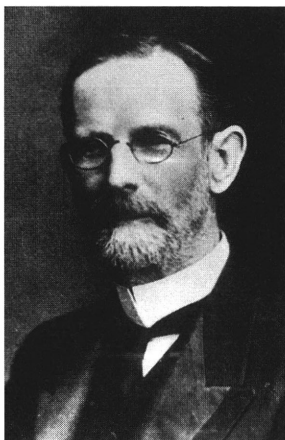
砂本は、アメリカのキリスト教の教派である「アメリカ南部メソジスト監督教会」のウォルター・ラッセル・ランバス (Walter Russel Lambuth) を神戸に訪ね、広島におけるキリスト教伝道の援助を願い出た。アメリカ



ナニー・B・ゲーンズ



ウォルター・R・ランバス



砂本貞吉



カ南部メソジスト教会は、砂本の願いを聞き入れ、広島を伝道域の一つとして設定した。最初は、キリスト教の伝道所（現在の日本キリスト教団流川教会の前身）と広島英和女学校（広島女学院の前身）が同居する形であったが、一八八七年に広島英和女学校は細工町に移り、教会は一八九〇年には紙屋町に教会を建て、それぞれ独立していくのである。

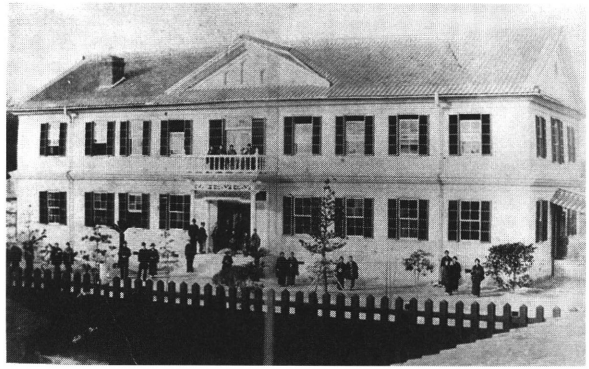
三 ウォルター・R・ランバスと 創設に関わった人たち

メソジスト系教会は三つの分派があり、アメリカ・メソジスト教会、カナダ・メソジスト教会とアメリカ南部メソジスト監督教会の三つに分かれる。アメリカ南部メソジスト監督教会はウィリアム・ランバス夫妻、息子のW・ランバスとデュークスの四名を最初の日本宣教部員（Japan Mission）として任命。一八八六年十一月にW・ランバスが三十二歳で日本宣教部の総理として着任する。三十代のW・ランバスと砂本は意気投合するのである。

広島英和女学校の設立当初は、いろんな人が携わっているが、その中でも、宣教師ゲーンズがアメリカからやってくるまでの数カ月間、大阪の土佐堀町梅花女学校を卒業した杉江田鶴が広島英和女学校の教師として支えている。

四 初代校長ナニー・B・ゲーンズ

ナニー・B・ゲーンズ（Nannie B. Gaines）は、一八六〇年にアメリカのケンタッキー州ユニオン郡に生まれた。ゲーンズの生まれた年はエイブラハム・リンカーンが大統領となり、一八六一年から南北戦争が始まるアメリカ混乱期であった。ゲーンズの父方の祖父バーナード・ゲーンズは、初代大統領



ワシントンに任命されたアメリカ合衆国軍将校であった。また母方の祖父であるウイリアム・クロムウェルは、メリーランドの立法会議の議員であった。のちに両家とも東部ケンタッキーへ開拓者として幌馬車でやってくる。つまりゲインスは、フロンティアとしての血を受け継いでいたのである。ゲインスに聖書

渡る前まで一年間、ここで教師をしていた。フロリダで教師をしているとき、教会で手にとった「クリスチャン・アドボケート」にあった、広島でキリスト教に基づく女子教育をする人を求めているという求人広告が目にとまった。W・ランバスは砂本を助け、広島英和女学校を支える宣教師をアメリカの伝道局本部を通して募集したのである。これは彼女にとって摂理であり、神から与えられたミッションであった。

ゲインスは一八八七年、「あなたを日本に派遣する」という本部ナツシユビルからの返事の手紙をケンタッキーで手にし、フロリダに戻ることなく三日目に、サンフランシスコに向かっている。これは、妹たちに会って直接別れを告げれば、きつと自分の日本行きの決心は揺らいでしまうと思ったからである。ここが彼女のフロンティア精神の表れであろう。

五 ゲインスの苦勞

ゲインスがやってきた広島は、「安芸門徒」と言われる熱心な仏教徒の多い地域であった。最初は女子教育のために来たアメリカ人を歓迎したのであるが、キリスト教を基盤とする教育を行うと知った人たちは、山中女学校という競合校を設立した。

当時、鹿鳴館のいきすぎもあり、欧化主義の風潮も下火になりつつあり、国粹的風潮が主流となってきた時期でもあつ

奴隷制度の存在する中、家に仕えていた黒人のボブであった。決して経済的に恵まれていなかったが、勉強好きであったゲインスのため、兄が大学進学をあきらめて、彼女をケンタッキーの Franklin Female College に入学させてくれたのであった。大学卒業後は、故郷ユニオン郡の公立小学校の教師として働いた。その後、フロリダ州のリースバーグの小学校に勤めることになった。彼女が日本に来る一年前の一八八六年には、Florida Conference College からの招聘を快諾しており、日本に

1910年の幼稚園園舎



た。キリスト教に基づく全人教育を譲らない広島英和女学校からは教師を引き抜かれ、後任のなり手もなくなり、一八八九年四月には休校することを余儀なくされた。

失意の中で神戸のランバス家に身を寄せ、神に祈り、自分のあり方を考えたゲーンズは、五カ月後の九月、新たな決意で広島に戻った。それは、もはや砂本の支援者ではなく、自分が主体的に広島的女性たちと関わることを考えたのである。西洋文化とキリスト教を広島の女性たちに強要し変えようと

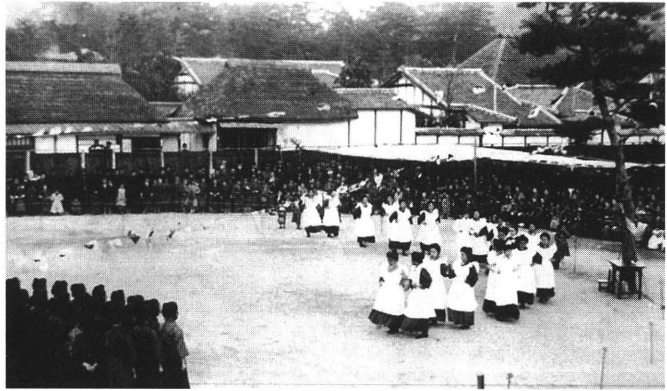
するのではなく、日本の女性の生き方を尊重しながら、精神的な自由への解放を目的とすること。つまり、男性中心の社会の中で、家族を守り、家の伝統を守る女性たちに、女性であるがゆえに強要されて伝統を守るのではなく、自らの自由意思で自尊心をもつて生きる生き方を教えたいと思ったのである。

アメリカ南部メソジ

スト監督教会とW・ランバスは、当時神戸市外原田村に関西学院を創設するため、上海香港銀行から無担保で融資を受け資金準備をしていたが、広島に一人で戻るゲーンズと再建される広島英和女学校のため、広島上流川町に、関西学院と同じように土地を購入してくれていたのであった。W・ランバスという人物は、関西学院と広島女学院両校の設立に強く貢献したのである。

六 幼稚園と小学校を開設

一八九一年にゲーンズは、幼稚園をつくる準備にとりかかった。広島にはキリスト教教育に基づく幼児教育のできる人がいなく、園舎もなかった。しかし、祈りの中から人は与えられた。神戸の頌栄保姆伝習所（現在の頌栄短期大学）の第一期生の松浦品子と、神戸女学院の一期生でアメリカ留学から帰国後、頌栄保姆伝習所に奉職していた甲賀ふじの二人を雇うことができた。ここでもまた、キリスト教に反対する人たちが競合幼稚園をつくり、園児を確保することができなかった。ただでなく、園舎は完成して二、三日の台風で倒壊してしまった。また、一八九〇年にはアメリカから新たな宣教師二人も派遣され、広島英和女学校も再開したのであるが、九月に竣工した新しい校舎が十月には放火と思える火災に遭い、全焼してしまった。この苦境の中、アメリカの南部メソジス



ト監督教会のナツシユビルにある本部は救いの手を差し伸べ、またもや学校を再開することができたのである。

一八九二年には、幼稚園卒園の保護者から小学校を開設してほしいとの要望があり、一八九三年、正式に文部省の認可を受けた広島英和女学校附属小学校が開設された。この小学校は一九三七年まで続いたのである。

四年にはマーガレット・クック女史が就任した。遊戯を指導したマコーレー女史は、新しい保育方法「スキップ」を日本で初めて取り入れた。

しかし、メソジスト本部からの計画で、広島には家事科と英語科を残し、幼児教育であるこの保姆師範科を大阪に移すことになり、広島女学校（一八九六年に私立広島女学校と改称）の保姆師範科は、ランバス女学院保育専修部となった。このランバス女学院では、のちの広島女学院大学において卒業生第一号学長となる広瀬ハマコが、アメリカから帰ってすぐ宗教教育科教授として教えることになる。また戦争の兆しが顕著になる中、現在西宮にある神戸女学院の敷地において、ランバス女学院とすでに神戸から移転していた神戸女子神学校が合併した。これはのちに聖和大学（現在は関西学院教育学部として合併）になるのである。

八 ゲインスの後継者広瀬ハマコ

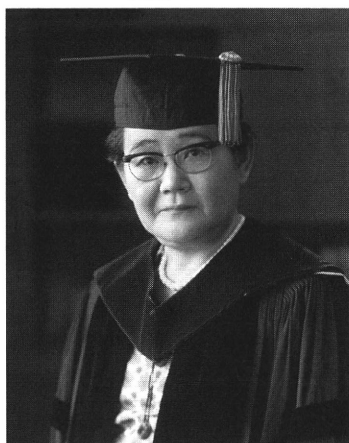
広島女学校のゲインス校長は、ケンタッキーから送られた匿名のスカラシップをもとに、特待生として地方の優秀な女の子を広島で教育しようとしていた。広瀬ハマコは広島県の神石郡（現在の油木）の山奥に生まれ育った優秀な小学生だった。その彼女にこの幸運が舞い降りた。

一九二五年に広島女学校の専門部を卒業した広瀬ハマコは、

七 幼児教育の専門家養成

一九〇八年に保姆師範科をつくった。日本の幼児教育を担う女性を育てるという目的で、アメリカから専門家もやってきた。一九〇一年にファンシー・マコーレー女史が、一九〇

広瀬ハマコ



二十三歳でアメリカのセントラルカレッジの三年に編入することになり、一九二九年には学士の学位をとり卒業。その後、テネシー州ナッシュビルにあるスキヤレット大学とジョージ・ビーボディー大学の大学院で英語と宗教教育を学ぶ。一九三九年に日本に帰った広瀬ハマコを迎えたのは、広島女学院ではなく、大阪のランバス女学院の宗教教育科教授の職であった。

一九三七年、日米の関係が悪くなる中、広瀬ハマコは、十三歳でランバス女学院の院長となった。ランバス女学院は、軍の圧力で大阪の校舎を明け渡さなければならなくなり、行き先を探していた。神戸女学院はすでに神戸の山本町から西市岡田山に移転しており、その場に神戸女子神学校も土地を誘致してもらい移転していた。神戸女子神学校は同じキリスト教でも宗派が異なる（組合派）のであるが、広瀬は一九

四一年にランバス女学院と神戸女子神学校の合併を成し遂げ、宗派の異なる二つの学校が一つになることが国からの要請ではなく神の意志で

原爆投下の瞬間と高等女学校の廃墟



あると考え、聖なる和合であるとして、聖和女子学院と命名、初代学長・院長となった。ちなみにこの年は真珠湾攻撃、日米開戦の年となったのである。

大きな仕事を成し遂げたのち、体を壊した広瀬は療養のためアメリカに行き、一九五〇年、コロンビア大学に博士論文を提出、学位を取得し、日本への帰路に着いた。

一九四五年に太平洋戦争での原爆投下を経験した広島女学院（一九三二年に広島女学院と改称）は、三百五十人もの生徒・教職員の命が奪われ、建物も壊滅状態になった。当時、日野原善輔理事長（日野原重明聖路加病院理事長のご尊父）の決定で法人が戦前に牛田山に土地を購入してあったため、広島で

は最初に学校を再開することができたのである。

当時の松本卓夫広島女学院院長は、広瀬に、聖和から広島に戻り、自分のあとを継いで院長になってほしいと頼む。そこで、「卒業生に学校の運営を託すこと、そのために広瀬ハマコをアメリカに行かせた」ことが亡きゲーンズの遺志であったことを告げられる。

一九五一年、広瀬ハマコは決意を新たに広島に戻ってきた。当時四十六歳。一九八二年、七十七歳で幼稚園園長を退任するまでの三十一年間、広島女学院のために献身したのである。そこから広島女学院の第二の時代が始まるのである。一九四九年に新制大学、一九五〇年に短期大学の設置が認可される。中学校・高等学校は一貫教育機関とし発展。戦時中休園していた幼稚園も一九六二年にはゲーンズ幼稚園として再開。今年、再開園五十周年を迎えた。

九 第三の創成期

二〇一〇年四月、広瀬ハマコが退任してのち四十年目にして、卒業生第二号学長として筆者が就任した。筆者は小学校三年間をアメリカで過ごし、一九六二年帰国直後に広島女学院中学一年生に仮入学が許された。広島女学院として初の帰国子女受け入れであった。中高を経て、広島女学院大学を一九七二年に卒業。一九八九年に神戸女学院大学院文学研究科

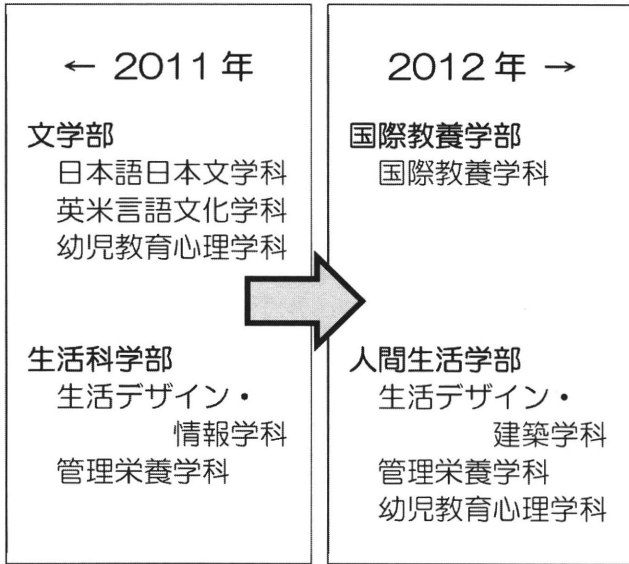
より修士号を取得。その後、一九九六年に聖和大学の助教授として五年間教鞭を執る。また、広瀬ハマコを偲んで設置された「広瀬ハマコ奨学金」を第一号として授与された。この奨学金は、卒業生として広瀬ハマコの遺志を継いでほしいという願いでつくられたものであった。

広瀬ハマコが初代院長となった聖和大学。筆者もその聖和で教え、広島女学院に戻り、二代目卒業生学長として広瀬ハマコのあとを継いでいる。偶然のようで、摂理を感じる。

十二 二〇二二年の全学改組

広島女学院大学は、設立以来時代に合わせ、そのつど学部を編成してきている。二〇一二年度の改組は時代に先駆けるというよりも、ゲーンズがつくった当時の建学の精神に遡る。ゲーンズは、広島に着任するや、広島的女性に英語で授業を始めている。女性が自由に発想して自分の人生を主体的に選択するためのキリスト教に基づく人間教育を教育目標とした。また、アメリカの南部メソジスト監督教会の援助を受け、グローバルな視点で留学生も受け入れてきた。

今、新たに国際教養学部を立ち上げ、国際感覚をもち、高い教養を身につけた女性を育てようとしている。ゲーンズ、広瀬ハマコが共に力を入れた平和教育は、広島で原爆を経験した大学として継続しているものである。特に二〇一一年度



からは、東京・青山にあるウエスレー・ファウンデーションと協働して二年連続、多くの国の学生たちを招いて「ピースセミナー・イン・ヒロシマ」を開催した。

また二〇一一年、文部科学省の私立大学戦略的研究基盤形成支援事業に採択され「障がい学生高等教育支援研究所」を開設している。これは、創立以来大切にしているキリスト教

に基づく「隣人愛」を具現化するものであり、学生一人ひとりが自分を大切にし、他者を認め受け入れ、共に生きる社会を構築できる人間教育を継承しているにすぎない。

十一 まとめ

百二十六年という歴史は長い。明治維新以来、日本は西洋文化を積極的に吸収していった。それに伴い、教育の分野でキリスト教を受け入れていった。広島女学院の歴史だけを見ても、関西学院、神戸女学院、梅花女学院、頤栄短期大学、聖和大学など、アメリカ人宣教師によって一八七七年以降に設立された学校と深い関係をもっていることがわかる。

長い歴史は、広島女学院の伝統と校風をつくり出してきた。時代の大きなうねりに翻弄されながら、最初の設立者の目的から逸脱してしまい、経営と学院存続のみに必死になった時代もある。しかし、もし建学の精神であるキリスト教主義に基づく「女子の霊性、知性、徳性を育む」(学則第一条)という目的を見失うことになるのであれば、広島女学院大学の存在は無いに等しい。

先達たちが、先の見えない中で、祈りながら神からのミッションを問い続け、教育の意味と大学の存続意義を確認していったように、これからも、祈りの中で、国際的な感覚をもった自由人である女性を育んでいきたい。

父母会活動の成否は 大学の総合力にあり

横山 博行 ● 関西大学理事付局長・教育後援会幹事長

関西大学教育後援会とは何か。本年十月に現職を拝命したばかりの新参者にうんぬんする資格はないが、六十五年の歴史の中で脈々と受け継がれてきた「大学と家庭の心のかけ橋」「わが子の母校はわが母校」「教育の礎は家庭にあり」「目を離すな手を離せ」等々のことばに示されているように思う。そして、本会の諸事業の成否は、順不同で次の三つが相まっただけの大学としての総合力にかかっていると考ええる。

- (1) 父母・保護者の熱意
- (2) 大学関係者の理解と協力
- (3) 組織力

現況をかいつまんでご紹介したい。

(一) 総会・学部別教育懇談会Ⅱ「父母の一日大学」

毎年五月の第三日曜日、千里山キャンパスで開く総会は本会の主要行事である。全国各地から五千人を超える父母・保護者が出席、会長選任などの重要事項を審議する。

午後からの学部別教育懇談会では、教育方針や大学生活に

平成24年度教育後援会総会



関わる諸事項が説明される。先生方との和やかな語らいの場もあり、出席者の満足度は極めて高い。

この日に合わせて、図書館や博物館など学内の主要施設で特別展が開催されることも多く、子女が通う大学そのもののへの理解が深まるだけでなく、生涯学習の観点からも意義深い「父母の一日大学」となっている。

まさに「わが子の母校はわが母校」であり、総会・学部別教育懇談会の場には、長い年月をかけて築き上げ、深められてきた大学と家庭との信頼関係が息づいている。「大学と家庭の心のかけ橋」の理念を具現したものと言えるだろう。

(二) 地方教育懇談会

「父母の一日大学」の各地域版とも言うべき教育懇談会で、遠隔地にお住まいの父母・保護者のため、大学の夏季休業期

間を中心に全国各地で開催している。大学から多数の先生方が出席、教育方針や現況、学業、学生生活、就職等について全般的な説明があったのち、学部ごとに懇談の場がもたれる。

(三) 就職説明懇談会

学生の就職問題の重要性はいつの時代も変わらない。昨今の就職状況を反映してか、父母・保護者の関心は高まるばかりである。現在、三年次生はもちろんのこと、二年次生や一年次生の父母等に向けた懇談会も開催している。前者は就職活動全般に、後者は職業観や勤労観の確立、学生生活の充実などに力点を置いたものである。

開催にあたっては大学、特にキャリアセンターの全面的な協力を得ており、学外講師による講演その他、充実した内容は多数の出席者の好評を博している。

(四) 刊行物・DVDなど

全家庭にお届けする会報『葦』は年三回の発行である。企画・編集に際して各学部の先生方に会報編集顧問を委嘱しており、折々に貴重なご助言を得ている。学生生活全般について理解を深めていただくための手引書『関西大学ガイド』は新入生の父母等に向けたもので、昨年度から「わが子の四力年日記」(四力年ダイアリー)を新たに加えた

時代とともにその内容に変遷はあるが、入学記念品や卒業記念品の贈呈も継続している。

特筆したいのが映画の製作であり、その歴史は昭和二十六年にさかのぼる。現在は毎年内容を改訂したDVDを製作し、地方教育懇談会などで鑑賞に供している。その時々大学の

動きや学生の姿を正確に記録したものととして、資料的な価値も高い。

(五) セミナーハウスの管理・運営

大学からの委託を受け、飛鳥文化研究所・植田記念館など、各地にある六つのセミナーハウスの管理運営を行っている。

いずれも風光明媚な地にあり、ゼミナール活動や各種のセミナー・研究会に対応できるよう、環境整備に配慮している。

(六) その他の諸事業

学生の課外活動や学園祭、先生方の研究活動への助成、図書への寄贈なども経年的な事業である。

(七) 強固な組織力

歴史と伝統に根ざす強固な組織力は本会の強みであり、その要となるのが会長以下の本部役員である。平成二十四年度の場合、会長一名、副会長三名、監事二名、常任委員三十五名で構成する常任委員会のもとに、総務・財務・事業・組織・広報の各委員会を設置している。諸会議の開催、多数の委員や全国各支部との連絡・調整など、広範な任務を担っていただいており、その労力は並大抵のものではない。日常業務を支える本部事務局は現在十名体制で、大学内の各部局と連携をとりながら、「かけ橋」の役割を担っている。

このようにさまざまな事業を行っている本会の未来を考えるにつけ、「不易流行」の四文字が頭に浮かぶ。向井去来の『去来抄』に「不易を知らざれば基立ちがたく、流行を知らざれば風新たならず」とある。俳諧の世界に限ったことではないと思われる。

父母力(育友会)が 大学をサポート

庄 菊博 ● 専修大学育友会主任教授(法学部教授)

(一) 父母の会「育友会」の誕生

「五月病を防ぐためにも、大学と父母が互いに密接に連絡し合える組織をつくる必要がある」。昭和三十三年の入学式直後の大学との懇談会での席上、多くの地方出身の父母からの意見であった。これを受ける形で、同年五月に昼間部(一部)に在学する学生の父母の会「育友会」が創立された。会の名称は、「学生を育成する友の会」との意味を込めて「育友会」とされた。会長や副会長等の要職者は父母から選出、それを大学の教職員が支える体制は現在と同様であった。また、当時の事業計画も現在とはほぼ同様であったが、予算面からも、学生の健康管理に関する事業の助成に力点が置かれていたのは時代背景であろうか。

以下、本稿では、「育友会」の特徴的な事業である支部懇

談会と会報『育友』について紹介したい。

(二) 支部懇談会の開催

昭和三十四年、これも父母の要望を実現する形で、教職員が地方に赴いて大学について説明し、また、父母からの相談に応ずる支部懇談会(当時は地方懇談会と言った)が開催された。同年度の開催地は、広島、福岡、鹿児島、郡山、帯広、札幌の六カ所であった。その後、全国に六十七支部が存在するに至り、夏期休暇中、支部懇談会は六十四会場で開催されている。大学からは、延べ三百名を超える教職員が会場に赴いている。現在、海外には正式な支部は存在しないが、これまで台湾と韓国で同様な懇談会を開催している。ことに韓国については、四年に一度の懇談会の開催が定着しつつある。

支部懇談会の運営・プログラムは各支部に任されており、支部ごとの創意工夫が見られるが、典型的な例は、以下のとおりである。すなわち、午前中は大学・育友会紹介DVDの放映(毎年、新たな内容で作成)、大学からのお知らせ(学業、学生生活、就職)、昼食を挟んで、午後はグループ面談(主に一年次生父母を対象)と個人面談である。会場では対応できない問題については大学に持ち帰り、後日、大学より回答する



会」を開催した。

(三) 会報『育友』の発行

昭和三十三年、育友会発行の情報誌である会報『育友』が創刊された。これによって、直接的には種々の会合に参加することができない会員にも、広く大学や育友会に関する情報を発信することができた。もっとも、創刊号はB6判十七ペ

方式を採用している。

昨年の東日本大震災の発生に際しては、東北六県及び茨城県の計十支部にあつては、通常の支部懇談会ではなく、別途、各支部における被災状況に配慮するとともに、他方で、被災学生の学業の継続に重点を置いた「修学支援相談

ージのミニミニ会報であった。その後、会報『育友』は掲載内容も充実し、発行回数も年四回となり、今年の秋号が百三十一号となっている。発行にあたっては、父母役員及び事務局(大学職員)が編集会議を開催して内容等を検討している。最近における編集コンセプトは、手にとってもらえる『育友』、ページを開いてもらえる『育友』である。そのため、写真を多用してアイコンタクトを図り、掲載記事も大学・育友会からの視点のみではなく、学生や父母からの視点によるものも多くなっている。いわば、時機をとらえた双方向的な情報誌を目指している。

(四) 人財・大学づくりのサポーター

現在、「育友会」の会員数は約一万七千人、会費収入は約一億七千万円/年である。これは決して小さな数字ではない。しかし、あくまでも「育友会」は大学の関連組織であり、父母の会である。「育友会」の活動は、大学の教育及び経営の方針にのっとり、学生・大学を支援・サポートすることにある。会員である父母は、他人の子どもであっても、自分の子ども同様のまなざしで見守っている。学生一人ひとりの幸せが、会員たる父母一人ひとりの幸せにつながっている。卒業生が「学んで良かった」と言える大学。「育友会」は、それを実現するために、日々の活動を行っている。